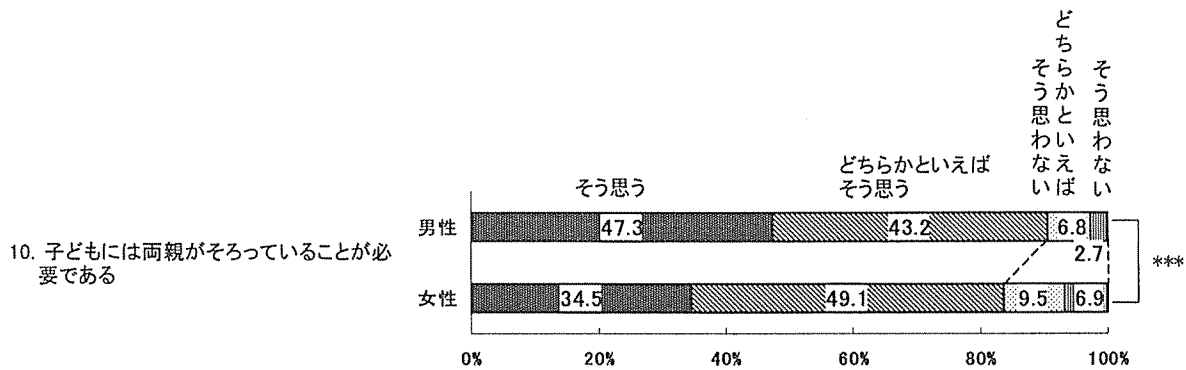


図表 2.19c 男女別にみた離婚家庭の子どもに対する考え(Q7)(続き)



男性は女性よりも、離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「生活が乱れやすい」、「学校で問題を起こしやすい」、「親から十分な世話が受けられない」、「片親で可愛そう」、「不良仲間のたまり場になりやすい」と考えており、また「子どもには両親がそろっていることが必要である」と感じていた。一方、女性は男性よりも、離婚家庭の子どもは「親思いであろう」、「同年齢の子どもに比べて自立しているだろう」と認識していた。

男性は、離婚家庭の子どもに対して好ましくない印象や、離婚による子どもへの悪影響を強く認識しており、離婚家庭の子どもは、問題行動を起こしたり、非行化したりしやすいと考えている。一方、女性は男性に比べて、子どもの精神的な成熟という離婚によってもたらされるプラスの側面を強く認識している。

## 2. 離婚に対する意識の構造

### (1) 因子分析による離婚に対する意識の構造の検討

離婚に対する意識の構造を検討するため、離婚・離婚する原因・離婚家庭の子どもに対する考えのすべてをあわせた全項目に対して因子分析（主成分分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値1以上の因子について、因子数を変化させながらバリマックス回転を行った結果、解釈可能性から、6因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第1因子から順に、11.9%、10.4%、9.6%、5.8%、5.3%、5.1%であり、累積寄与率は48.0%であった。因子分析の結果を、図表2.20に示す。

第1因子は、「離婚家庭の子どもは、生活が乱れやすい」、「離婚家庭の子どもは、学校で問題を起こしやすい」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』を表す因子であると解釈された。第2因子は、「安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう」、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚する親への否定的イメージ』を表す因子と解釈された。第3因子には、「離婚は、恥ずかしいことである」、「離婚した人は、人生の敗北者である」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚に対する否定的評価』を表す因子と解釈された。第4

因子は、「女性が経済力を身につけたので、離婚が増加しているのだろう」、「離婚して幸せになれるのなら、離婚してもよいと思う」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚に対する好意的評価』を表す因子と解釈された。第5因子は、「離婚家庭の親は、ひとりで両親の役割をにない苦労しているだろう」、「離婚家庭は、経済的に苦しいだろう」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚家庭に対する同情』を表す因子と解釈された。第6因子は、「離婚家庭の子どもは、親思いであろう」、「離婚家庭の子どもは、同年齢の子どもと比べて自立しているだろう」などの項目の負荷量が高いことから、『離婚による人間的成長』を表す因子と解釈された。

図表 2.20 離婚に対する意識の因子分析の結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
<i>離婚家庭の子どもへの否定的イメージ</i>						
Q7_4 離婚家庭の子どもは、生活が乱れやすい	.87	.10	.09	.02	.06	-.05
Q7_5 離婚家庭の子どもは、学校で問題を起こしやすい	.83	.12	.17	.06	.01	-.04
Q7_3 離婚家庭の子どもは、非行化しやすい	.83	.10	.12	.00	.02	-.01
Q7_9 離婚家庭は、不良仲間のたまり場になりやすい	.73	.19	.12	.03	.00	.01
Q7_6 離婚家庭の子どもは、親から十分な世話が受けられない	.66	.09	.04	-.04	.25	.02
Q7_7 離婚家庭の子どもは、片親で可愛そう	.51	.24	.12	-.06	.32	.07
Q7_8 離婚すると、子どもにストレスがかかる	.49	.16	-.03	-.01	.37	.07
<i>離婚する親への否定的イメージ</i>						
Q5_1 安易な気持ちで結婚する人が、離婚するのだろう	.16	.66	.08	.05	.02	.00
Q5_3 離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である	.14	.66	.30	-.05	.01	.03
Q5_4 子どもがいるのに離婚するのは、親の身勝手である	.22	.65	.20	-.09	.20	.03
Q5_5 妻や子どもに対して無責任な男性が、離婚するのだろう	.09	.62	.09	.06	.21	.12
Q5_2 性格的に問題のある人が、離婚するのだろう	.22	.59	.05	-.03	.11	.14
Q4_1 (もし自分が結婚するとしたら)離婚だけは、どんなことがあっても避けたい	.17	.53	.19	-.01	-.04	-.02
Q5_6 我慢できない人が、離婚するのだろう	.14	.53	.10	.05	.22	.06
Q4_3 離婚するくらいなら、結婚しなければいい	.17	.52	.31	.05	-.23	-.14
Q4_4 子どもが成人になるまでは、離婚しないほうがいい	.35	.52	.11	.10	-.05	.01
Q4_2 (もし自分が結婚しても)離婚は、自分には関係ないことだと思う	.09	.44	.24	-.05	-.17	.02
<i>離婚に対する否定的評価</i>						
Q6_7 離婚は、恥ずかしいことである	.13	.22	.73	-.07	.07	-.04
Q6_6 離婚した人は、人生の敗北者である	.08	.25	.67	-.04	-.09	-.02
Q6_4 できれば離婚家庭の人とは付き合いたくない	.20	.08	.67	.05	-.01	-.09
Q6_5 離婚家庭の人に、どのように接してよいかわからない	.16	.07	.62	.00	.09	.07
Q6_9 自分の身内で離婚者がいても、周囲には言いたくない	.15	.20	.59	.00	.08	.13
Q6_13 離婚すると、交友範囲が狭くなる	.34	.01	.52	-.04	.12	.18
Q6_11 離婚すると社会的信用を失う	.37	.13	.48	.03	.26	.03
Q4_5 もし自分が離婚したら、人には言いたくない	.22	.29	.47	.03	.00	.04
<i>離婚に対する好意的評価</i>						
Q4_10 女性が経済力を身につけたので、離婚が増加しているのだろう	-.03	.19	.19	.67	.33	-.12
Q4_11 女性が自立したので、離婚が増えているのだろう	-.07	.18	.18	.67	.28	-.09
Q4_7 離婚して幸せになれるのなら、離婚してもよいと思う	.17	-.24	-.27	.61	-.13	.20
Q4_8 子どもに両親の絶え間ない喧嘩を見せるより、離婚したほうがよい	.04	-.13	-.11	.58	-.22	.16
Q4_6 今の世の中、離婚はよくあることである	.06	-.12	-.26	.55	-.11	.19
Q4_9 離婚は、人生の再出発である	.05	-.10	-.14	.51	.01	.39
<i>離婚家庭に対する同情</i>						
Q6_2 離婚家庭の親は、ひとりで両親の役割をにない苦労しているだろう	.22	.12	-.06	.15	.64	.08
Q6_10 離婚家庭は、経済的に苦しいだろう	.21	.02	.19	.10	.55	.05
Q6_3 離婚すると女性のほうが、男性よりも苦労するだろう	.14	.06	.14	.10	.54	.16
<i>離婚による人間的成長</i>						
Q7_1 離婚家庭の子どもは、親思いであろう	-.08	.12	.09	.05	-.01	.78
Q7_2 離婚家庭の子どもは、同年齢の子どもと比べて自立しているだろう	-.02	.09	.06	.01	.08	.76
Q6_1 離婚することで、人間的に成長する面があるだろう	-.01	-.20	-.28	.16	.14	.55
Q6_12 離婚したら、周囲から同情の目で見られるだろう	.36	-.01	.37	.05	.16	.27
Q7_10 子どもには両親がそろっていることが必要である	.32	.36	.05	-.11	.31	-.02
Q6_8 離婚した人に同情するのは、良くない	-.03	-.02	-.02	.06	.26	-.14
因子負荷量の2乗和	4.76	4.15	3.84	2.32	2.13	2.02
因子の寄与率(%)	11.89	10.37	9.59	5.80	5.33	5.05

## (2) 離婚に対する意識の尺度構成

因子分析の結果から、離婚に対する意識は、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』、『離婚に対する好意的評価』、『離婚家庭に対する同情』、『離婚による人間的成長』の6側面から構成されていることが明らかになった。それぞれの側面について、 $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha$ 係数は、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』から順に、.87、.83、.80、.68、.61、.64であった。そこで、各因子に高く負荷する（.40以上）項目の回答を単純加算し、各尺度得点とした。いずれの尺度も、尺度得点が高いほど、離婚に対して、当該の意識が高いことを示す。なお、『離婚に対する否定的評価』尺度および『離婚に対する好意的評価』尺度は、尺度得点の分布に偏りが見られたため、『離婚に対する否定的評価』尺度得点は、8点と9点、10点から12点、13点から16点、17点から30点をそれぞれ、1点、2点、3点、4点、5点と再カテゴリー化した。また、『離婚に対する好意的評価』尺度得点は、13点以下の回答者が極端に少なかったため、これらの得点を14点と再カテゴリー化した。

各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差とを、図表 2.21 に示す。

図表 2.21 離婚に対する意識の各尺度得点の分布範囲と平均と標準偏差

尺度名	N	分布範囲	平均	標準偏差
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	488	7~28	16.20	4.61
離婚する親への否定的イメージ	488	10~40	23.59	6.43
離婚に対する否定的評価	487	1~4	2.38	1.06
離婚に対する好意的評価	483	14~24	19.18	2.78
離婚家庭に対する同情	491	3~12	8.78	2.00
離婚による人間的成長	491	3~12	7.71	2.02

## (3) 下位側面別にみた性差と年代差の検討

次に、各尺度得点の性差および年代差を検討するため、性（男性、女性）×年代（30代、40代、50代、60代）の2要因分散分析を行った。その結果を、図表 2.22 に示す。

『離婚家庭に対する同情』尺度では、有意な性差・年代差が見られなかったが、『離婚家庭の子どもへの否定的イメージ』、『離婚する親への否定的イメージ』、『離婚に対する否定的評価』の3尺度では、男性の方が女性よりも、『離婚に対する好意的評価』と『離婚による人間的成長』とでは、女性の方が男性よりも、それぞれ尺度得点が高かった。また、『離婚する親への否定的イメージ』と『離婚に対する否定的評価』とでは、有意な年代差が見られ、60代は、他の世代よりも、各尺度得点が高かった。以上より、離婚や離婚する親・離婚家庭の子どもに対して、女性は好意的にとらえているのに対して、男性や60代の回答者は、否定的な捉え方をしていることが明らかになった。

図表 2.22 離婚に対する意識の各尺度得点に対する分散分析の結果

尺度名			30代	40代	50代	60代	検定	Scheffe法
離婚家庭の子どもへの否定的イメージ	男性	平均	17.76	16.94	16.80	16.89	性 *	男>女
		標準偏差	4.10	5.36	4.58	4.59		
		N	50	54	59	55		
	女性	平均	16.55	15.37	14.83	15.14	年代 ns	交互作用 ns
		標準偏差	4.32	4.08	4.58	4.62		
		N	73	57	76	64		
離婚する親への否定的イメージ	男性	平均	25.08	23.53	24.26	26.00	性 ***	男>女
		標準偏差	6.76	5.94	6.63	6.46		
		N	49	55	58	56		
	女性	平均	21.12	21.32	22.19	26.22	年代 ***	60代>30代,40代,50代
		標準偏差	4.69	6.05	6.45	6.58		
		N	73	57	75	65		
離婚に対する否定的評価	男性	平均	2.71	2.36	2.46	2.79	性 ***	男>女
		標準偏差	1.02	1.11	1.07	1.05		
		N	49	55	59	57		
	女性	平均	2.10	1.93	2.22	2.59	年代 ***	60代>40代
		標準偏差	1.00	0.95	1.00	1.07		
		N	71	56	76	64		
離婚に対する好意的評価	男性	平均	18.68	18.91	18.48	18.77	性 **	女>男
		標準偏差	2.42	2.93	2.94	2.81		
		N	47	53	58	56		
	女性	平均	19.84	19.56	19.52	19.25	年代 ns	交互作用 ns
		標準偏差	2.43	3.08	2.82	2.64		
		N	73	57	75	64		
離婚家庭に対する同情	男性	平均	8.50	8.86	8.62	9.13	性 ns	
		標準偏差	1.99	1.94	1.78	2.06		
		N	50	56	58	56		
	女性	平均	9.10	8.53	8.52	8.94	年代 ns	交互作用 ns
		標準偏差	1.86	2.16	2.21	1.94		
		N	73	57	75	66		
離婚による人間的成長	男性	平均	7.42	7.22	7.05	7.36	性 ***	女>男
		標準偏差	1.91	1.81	2.01	2.04		
		N	50	55	59	56		
	女性	平均	8.15	7.97	8.03	8.14	年代 ns	交互作用 ns
		標準偏差	1.85	1.85	2.16	2.18		
		N	73	57	75	66		

注:\*\*\* $p<.001$ 、\*\* $p<.01$ 、\* $p<.05$

### 第3節 結婚に対する意識

#### 1. 結婚に対する意識の実態

##### (1) 結婚に対する考え(Q2)

##### ① 結婚に対する考えの全体的傾向

結婚に対して、「今の世の中、結婚しなくても生きていける」、「問題のある結婚生活なら、早く解消した方がよい」と考える回答者は8割強であり、「男性は結婚しないと、一人前とはいえない」、「女性にとっての幸せは、結婚することではない」と考える回答者は4割であった。8割の回答者が「結婚しても、配偶者とは別に自分だけの人生の目標を持つべきである」と考え、9割の回答者が、「結婚後も、夫婦は互いに異性としての魅力を持つべきだ」と回答した。

一方、「結婚するのは、当たり前のことと思う」、「生涯独身で過ごすというのは、好ましい生き方ではない」、「結婚したら、子どもを持つべきだ」、「結婚生活に、多少の我慢は必要だ」、「一度結婚したら、最後まで配偶者に添い遂げるべきだ」と考える回答者も5割以上いた。昨今関心を集めている夫婦別姓には、8割弱が反対していた。

全体として、結婚しないという生き方も選択肢のひとつであるととらえられ、結婚が一